

ラフタフの大妊娠

作・演出 萬野 展

登場人物（登場順）

小見山^{こみやま} 教師。（倉橋）

春子 生物教師。（石田）

玉虫 会社員。（松山）

奈津美 会社員。（杉山）

早紀 高校生。（野沢）

美加 美容師。ゲイ。（早矢仕）

須藤 産婦人科医。（萬野）

父親 （有原）

*

精子くんA （萬野）

精子くんB （早矢仕）

精子くんC （倉橋）

精子くんD （野沢）

卵子ちゃん （有原）

ACT.1 授業

学校。教室。

担任教師小見山登場。教壇に立つ。

とたんに教室が騒然となったらしく、小見山、暫し鎮静を待つ様子。

小見山 ……（騒ぎを抑える）ハイ静かに。……うるさいよ。（漸く鎮まる）えー、皆さんもご存知のとおり、生物担当の小竹向原……（騒然度が高まり言葉を切る）

騒擾稍収まる。

小見山 ……。生物の小竹向原先生が急遽退職されることになりました。皆さんのなかには、既にマスコミ等の取材を受けた人もいると思います。が、今朝校長のお話にあった通り、良識ある対応をお願いします。はい。（生徒から質問が）本校の生徒としての節度ある言動ということですよ。はい。（質問）ノーコメントです。はい。（また質問が）それは諸君が心配しなくてもいい。はい。（質問）落語研究会の顧問については体育の村田先生が引き継ぐことになっています。はい。（質問）いいえ。それは違います。小竹向原先生は確かにたまたま覚醒剤を所持していたところを逮捕されましたが、裁判が済むまではあくまでも容疑者であって犯罪者ではありません。（騒乱巻き起こる）……。

小見山、バチバチバチと手を叩く、あるいは出席簿等でバンバンと音を立てて騒乱を鎮める。

小見山 ……他には。はい。（質問を頷いて聞いている）……おまえそれ本気で言ってるのか？（教室を見渡す）いいかみんな、先生はこのクラスの担任として、おまえたちのなかで、そんなことをしていた者はひとりもないと信じている。……他には。はい。

後任生物担当についての質問が出る。

小見山 ああ、その件についてなんだが、当面の生物担当は……（騒ぎ）なんだ。ん？なんだ、なんでそんなに長谷川先生がイヤなんだ。（シーン）なんだ、はっきり言ってみる。ん？（生徒のひとりが発言したのでそちらに注意を向ける）……山内、そんなにはつきり言つな。（教室内又騒ぎついてくる。小見山抑えて）あー、いいか、長谷川先生はたいへんまじめで熱心な先生であって……いや、それはよく聞けばわかるはずだ。……質問をすればいいんだ質問を。……それは基礎から理解してほしいという気持ちの表れであって……。生物という教科を心から愛している証拠で……。コラ、そういうことを言つな。山内、なんてことを言つんだ。……ちょっと待て。待て！

教室、鎮まる。

小見山 とにかく今小竹向原先生が抜けたコマを埋める先生は長谷川先生しかいないんです。ここはひとつ納得してもらいたい。生物、受験で使う者。（挙手がある）もしどつしても我慢できなかつたら俺のところに言いにこい。わかつたな。

小見山、教室を再度見渡し、異論が出ないのを確認。去ろつとする。

小見山 一時限目、さっそく生物だが…。山内。くれくれもさっすういうことを先生に向かつて言うなよ。…なにとぼけてんだ。さっき言ったる。そう、その、対人恐怖症とかなんとかさっすういう…。言うなっていつてんだ。じゃ。(退場しかけ)ええ? 今日のモノマネ? なに言うてんだ、こんな時に:(大騒ぎ)ああ分かった分かった!…最近ネタがないんだよ…。

小見山、日替わりネタを披露する。
つけよつとつけまいと、去る。

生物教師長谷川春登場。

長谷川は、生徒とは目を合わせない。結局挨拶無しで唐突に授業を始める。

長谷川 なぜ生物を勉強するか、生物の勉強をすることにはどんな意義があるのでしょうか。みなさんは中学の理科のなかで生物を一生懸命学んできたわけですが、ここで改めて生物とはどういう学問なのかを考えてみましょう。

生命とは何か。それをこれから皆さんと一緒に学んでいくわけですが、古来人間は生命についてどのように考えてきたのか、有史以前、紀元前数万年の昔原始人がすでに野牛が野山を走る姿を洞窟の壁に刻んでいます。有名なラスコーの壁画などはたいへんに雄々しく、躍動感に溢れ、写真でしか見たことはありませんが、いつか本物を見たい。そのように思っております。さて。ギリシャ時代、プラトンは、生物と無生物の違いは靈魂の有無であると考えました。プラトンの弟子アリストテレスはこの靈魂をさらに三種類にわけ、植物性、動物性、人間性の三種類の靈があると考えていた。まるでマーガリンのようですね。このアリストテレスの生気論については教科書六頁に書かれています。彼の生物学への貢献はたいへん大きいわけで、生物を初めて動物と植物に分けたのも実はこのアリスト…

生徒がたまりかねて遮る。

長谷川 ……はい。はい。あ、百九十二頁。あ、そこまでは。はい。聞いております。それはもう間違いなく把握しております。ぜひご安心下さい。

それでは、それでは教科書百九十三ページ、……遺伝の仕組み。……なぜ遺伝の仕組みを学ぶか。現代遺伝学のような考え方はいったどこから出てきたのか。遡さかのぼっていくとやはりアリストテレスの生気論に端を発するわけでありますが、そのあとにくるキリスト教的な世界観、これが生物学にあたえた影響はまことに計り知れない、とくに生命の起源について、全知全能の神がこれを作ったというキリスト教の教えを科学的に裏付けようとする数知れない努力、これが中世、そしてルネッサンスを経て、十九世紀に至るまで続けられてきたわけです。その時期の代表的な生物学者といえばガレノス、そしてハーベイ、機械論のメトリイなど、これは教科書の最初に方に確か写真が載っています…あつ、教科書七ページに載っていますね。そして教科書には載っていないのですが、この時期で見逃せないのが大鍊金術師と言われたパラケルスス…はい。

生徒がまた遮った。

長谷川 ……うん。うん。ええ。はい。それはもう、ええ、受験は大切。はい。そうです。ええ、ポイントを、はい、よつりようよく、はい、わかりました。

長谷川、教科書をあちこちひっくり返している。

長谷川 ポイントを…ポイントは…は、ただいま。はい？ あ、なるほど、受験がすべてではない、なるほど、一理あります。はい？ あ、ポイントは今、探しているの…、もう少々…、は？ ポイントはもういい。あ、でもあの…あ、

生徒たちの間で騒然と

長谷川 あ、あの、みなさん、どうぞ、あの、落ち着いて…。あの、みなさん、それぞれのおっしゃることは、たいへん、あの、もつともで、ええ、この際は、わたくしが、なるべくポイントを押さえつつ、かつ、親しみやすい、授業をこころがけるということで、ひとつ、はい？ はい、それでは…

長谷川 えー、遺伝。遺伝といえば昨今ではバイオテクノロジー、遺伝子組み換えなど、遺伝子に関わる話題が多いわけですが、はたして遺伝について私たちはどれだけ理解しているでしょうか。私が思うに、いわゆるセルフイッシュユな遺伝子、すなわち利己的遺伝子などという表現にあらわされるように、いたずらに遺伝子を擬人化し、人間の自由を束縛する決定論的な悪玉的なイメージを…はい、はい、

長谷川 あ、トイレ。はい、あの、どうぞ、お気をつけて。いってらっしゃい。…えー、教科書に戻りまして、遺伝…遺伝については、現代の生物学を持ってしてもいまだに解明できない点も多くありまして、例えばえー、あ、はい、ど、どうぞ、…例えばこの、このミトコンドリアなども、教科書ではあの、非常に簡単な説明で終わっていますが、なぜ、このような、独自の遺伝子を持つ存在が人間の細胞の中に共生しているのか、その謎は深く、あ、はい、…ミトコンドリアの起源については諸説あり、例えば面白いのはリン・マーギュリスによればミトコンドリアは、昔々、細胞というものが作られた時、原始の海の中を泳いでいた別種のバクテリアだったのではないか、細胞というものは、細胞壁に囲まれた小さな海であると言えるわけで、その母なる小さな海と一緒に…あ、はい、え、図書館？ 図書館に…あ、調べものを…はあ、それは、はい、あの…どうぞ、お気をつけて…

長谷川 えー、えーミトコンドリアといえば…余談ですが、近年「パラサイト・イブ」などという小説もしくは映画などありましたが…あのような非科学的な…どうしてミトコンドリアに人格があるのか…そんな馬鹿な。そんな馬鹿な話はないわけ…また映画としても目を覆う出来であった、なんで最後に燃えてしまうのか…そんな馬鹿な。とつてい納得するわけには…はい、え、あ、保健室。どうぞ、あの、お大事に…

長谷川 あ、あの、余談はこれくらいにして、教科書に戻りまして、…メンデル、メンデルです。えー、メンデルはフランスの片田舎で牧師の息子として生まれ、そして、メンデルもまた聖職者の道へ…あ、皆さん保健室へ…あの…どうぞお大事に…

一人を残して生徒全員がいなくなる。

長谷川 ………。あの、起きていらつしやいますか。はからずもあの、マンツーマンと
いつよつな状況に…えー…あの。
生徒は起きない。

長谷川 …。

担任小見山、顔を出す。

小見山 あららら。

長谷川 …。

小見山 ちよつと様子を見に来たんですが…

長谷川 …まことに、あの…申し訳ありません。

小見山 一人残りましたか。まあ、こんなもんですかね。おい島村。島村！ 起きろ

島村！

小見山 どうだ、長谷川先生の授業は…オッケーということだね。ま今日はこのへん
でいいでしょう。

長谷川 …はい、あの、たいへん力不足で…

小見山 ああまあまあ、だいたい予想通りですから気にしなくていいです、さ、いきま
しょう。おい、島村、ちよつとおまえに話があるから、進路指導室。いいから。

長谷川 …。

教師ふたり、退場。
照明が変化する。

ACT.2 プロポーズ

スーツ姿の若い男・玉虫、ドア前で。

玉虫 菜津実さん？ 菜津実さん、僕です。玉虫です。

答えはない。

玉虫、チャイムを鳴らしたり、ノックしたり

玉虫 菜津実さん？ 菜津実さん。

菜津実、寝間着に近いような普段着、ゴミ袋を持って、登場。

玉虫 あ、なつ…

菜津実、玉虫を押しつけ、スタスタと歩いていく、

玉虫追いつつ、

玉虫 あの、菜津実さん、おはようございます。あの…、あ、

菜津実、玉虫をまったく気かけずに退場。

玉虫 待つてくださいいよ、菜津実さんてば！

菜津実、退場してしまつ。

玉虫 …。

菜津実、ゴミ袋をそのまま持って引き返してくる。

玉虫 菜津実さん、玉虫です。あの、あ、わーお…

菜津実、玉虫をまったく気にとめず部屋に戻る、退場。

玉虫 菜津実さん。菜津実さんが、休みのときに会社の人間と会つのがなにより嫌い
だってことは承知のうえですね、あの…

菜津実、違うゴミ袋を持って登場。

玉虫 承知のうえで、課長に言われて已むを得ずですね、あの…

菜津実、そのまま素通りして退場。

玉虫 菜津実さんでないかわからないこととかあって、あと渡すものとか、あの、あの、

菜津実、ゴミ袋を持たずに戻ってくる。

玉虫の前で停まる。

玉虫 あの…、燃える日と燃えない日を間違えたんですね。

菜津実 …。

菜津実、黙って部屋に入る（退場）

玉虫 あつ、あつ、すみませんすみません。よけいなことでした！ 菜津実さん！ ほ
んと、ほんとに、用が済んだらすぐ退散しますから！ おじゃまはいたしません
から！

菜津実、手だけ出して、招く。

玉虫 ……ありがとうございます。お邪魔します。

玉虫、退場。

場転、菜津実の部屋。

玉虫、登場（靴は脱いでいる）

玉虫 スミマセン。

追って菜津実、ちょっと露出度の高いかっこうになっている。

菜津実 なにも出ないわよ。

玉虫 いや、ほんと、おかまいなく。

菜津実 すわったら。

玉虫 あ、すみません。

玉虫、座って、はじめて入る菜津実の部屋にきよるきよる。

菜津実 なに見てんの。

玉虫 えっ、あっ、いや、あの…トロフィー。

菜津実 ……。

玉虫 すごいっすね。全部取ってあるんですか？ あの、インターハイのときから…

菜津実、玉虫がしゃべっている間に姿を消す（退場）

玉虫 いやあ、やっぱりすごいなあ…オリン…ピックに出るような人ともなると…。

玉虫、尻つぼみに黙る。

菜津実、トレーニングウェア姿で戻ってくる。

菜津実 （ウォーミングアップを始めながら）わからないことって何。

玉虫 え、ああ、あの、（カバンから書類を出す）この注文書なんですけど…

菜津実 （受け取って）ああ、これ。

玉虫 この数字って…

菜津実 これはグロスよ。で、この下がダース。

玉虫 やっぱりこれダースですか、多いと思っただんですよ。

菜津実 そこ、いつもそうなのよ。いくらいつても単位書かないんだから。

玉虫 あー、そうなんですか。

菜津実 聞きたいことってそれだけ？

玉虫 え。

菜津実 そんなこと誰でも知ってるわよ。

玉虫 え、そ、そうすか？

菜津実 ホントは課長に言われてあたしが課長とやりあったから、このまま辞めるんじゃないの。

玉虫 ちがいますよ！

菜津実 休みに入る前にあたしが課長とやりあったから、このまま辞めるんじゃない

かって思ってたでしょ。

玉虫 いや、そんなことないですよ。ぜったいなんです。

菜津実 玉虫くん。

玉虫 はい。
 菜津実 押してくれる。
 玉虫 …失礼します。

玉虫、菜津実の背中に回って柔軟を手伝う。

菜津実 …なにしてんの。

玉虫 え、いや…

菜津実 押しなさいよ。

玉虫 押しします。

菜津実 ぜんぜん駄目。もっと力入れて。

玉虫 いいんですか。

菜津実 いいから。

玉虫 いきますよ。

菜津実 もうちよっと下。

玉虫 このへんで。

菜津実 どっぞ。

玉虫 いきますよ。

菜津実 早く。

玉虫 …。

菜津実 なにしてんの。

玉虫 押してます。(ものすごくゆっくり押している)

菜津実 日が暮れちゃうでしょ。だいたいぶだからさっさとやっ

玉虫 押しますよ。えいっ…わあ

菜津実が床までべったり前屈したので驚愕する玉虫。

菜津実 そのまま腰のあたり押しといて。

玉虫 了解しました。

菜津実 で、課長、なんだって？

玉虫 やめてくださいよ。ホントに。僕、スパイじゃないですよ。

菜津実 どうかしら。

玉虫 あれは課長が悪いですよ。だって菜津実さんはオリンピック選手なんです。世界で通用する一流選手じゃないですか。トレーニングのための時間を確保するのは当然の会社の義務ですよ。

菜津実 それ本気で言ってるの。

玉虫 当たり前じゃないですか。

菜津実 別にね、選手としての宣伝力を買われて入社した訳じゃないからね。うちみたいな業者相手の中小企業がいくら名前売ったってそれで銀行が金貸してくれるわけじゃないんだから。

玉虫 だってこないだのシドニーのとき、会社のロゴ入りのユニフォーム着てたじゃないですか。

菜津実 免罪符みたいなもんよ。ひと月丸々仕事休んだからそれくらいいいじゃないと。

玉虫 会社対して恩恵与えてるってことじゃないですか。

体勢を入れ替えて、違う柔軟体操を。

菜津実 今時射撃なんてたいして注目されないのよ。金メダルでも取らないかぎり。

玉虫 次こそ絶対いけます。僕、信じてますから。

菜津実 ここんとこ、押してくれる。

玉虫、言われたとおりにする。

体勢がかなり怪しい絡みになる。

菜津実 もっと体全体で押して。乗っかっちゃっていいわよ。

玉虫 ……。

玉虫、思わずムラムラとなって、そのまま菜津実を抱きしめる。

菜津実 ……。

玉虫 菜津実さん…。

菜津実 あんまり幻想持たないほうがいいんじゃない。あのね、会社はあたしにそんなこと期待してないし、会社からみたらあたしは道楽にうつつを抜かしてる問題社員。どんなに忙しくて毎月有給は使い切る。長期休暇は取る。課長がイヤミのひとつもいいたくなるのは当然。

玉虫 ……。

菜津実 あたしが臆首ウツにならないのは、尻尾掴まれないように仕事をかっちりやってるから。それだっこのまま不景気が続けば怪しいもんね。だから玉虫くん。

玉虫 ……はい。

菜津実 あたしなんか肩入れしてもいいことないわよ。…出世したかったら。

玉虫 僕は…出世とかそういうことじゃないんです。菜津実さんだってわかっているはずだ。僕がしたいのは…菜津実さん…菜津実さんと…

菜津実 ……玉虫くん。

玉虫 菜津美さん、今日ははっきり言います。そのつもりで来たんです。僕と結婚してくださいませんか。

奈津美 ……。

二人、離れる。向かい合う。

奈津美 ……。

玉虫 本気です。

奈津美 わかってる。

玉虫 僕は…奈津美さん以外には考えられないんです。

奈津美 ……玉虫くん。

玉虫 はい。

奈津美 あなたの気持ちはうれしい。

玉虫 ……。

奈津美 でも無理だと思っ。

玉虫 なにが…無理なんですか。

奈津美 うまくいかないと思っ。

玉虫 僕じゃ駄目なんですか。

奈津美 ……。

玉虫 はつきり言ってください。はつきり言ってもらったほうが僕は…

奈津美 そっじゃないの。あなたよりあたしのほうが…

玉虫 …。

奈津美 問題あるから。

玉虫 問題があるなら…解決すればいいじゃないですか。僕が手伝います。手伝わせてください。

奈津美 …。

玉虫、柔軟体操の手伝いを再開する。
しばらく黙々と柔軟。

菜津実 渡すものって何？

玉虫 え。

奈津実 渡すものがあるって言ったでしょ。

玉虫 …あっ、忘れてました。(カバンこそこそ)郵便物が…菜津実さん宛のがあって…

菜津実 ダイレクトメールじゃないの？

玉虫 ええ、だいたいは…(手紙の束を渡す)

菜津実、素早く封筒の束に目を通していく。

菜津実 これとこれは取引先だから、あたしの机に置いて。この請求書は経理にまわして。あとは…ゴミ箱行き。(玉虫に渡す)

玉虫 燃えるゴミですよ。間違えないように。

菜津実 (ニヤリとして)ご親切に。

菜津実の手に、一通の封筒が残る。

菜津実 …？

玉虫 あ、それ、なんだかわからないんですよ。なんか個人的な手紙みたいだったんで…

菜津実 …。

開封する。目を通し、黙って手紙を封筒に戻し、ポケットにしまう。

玉虫 なにか…あつたんですか？

奈津美 …。

玉虫 菜津実さん？

菜津実 あたしこれから走るから。あなたはもう出社しなさい。

玉虫 …。

菜津実 それともいっしょに走る？

玉虫 …。

菜津実 「冗談よ。あなたがいないとあたしが休んでる穴が埋まらないんだから。行ってもらわなきゃ困るの。」

玉虫 …はい。

菜津実 カギしめなくていいから。じゃあね。

玉虫 奈津実さん。

菜津実、戸口で振り返る。

菜津実 …… 玉虫くん。返事、待って。

玉虫 はいっ？

奈津美 どっちにしろはつきり返事するから、今は、待って。

玉虫 …… はい。

奈津美 ごめんなさい。

玉虫 いえ。

菜津実、退場。

玉虫残る。

明かり変わる。

精子くんふたり（A・B）登場。

玉虫 そのとき彼女のもとに来た手紙が、どんな内容のものだったのか。僕は少しあとで知った。僕はまだ、なにも知らなかった。彼女は僕の指導社員で八つ年上の三十二歳。応援されないオリンピック選手。でもそれは目立たない種目っていうだけじゃない。彼女はまわりの人間に対して決して心を開かない…心の扉を閉め切っているからなんだ。

精子くんA・B わかるよ。

玉虫 でも僕はどうしても彼女といつしよになりたい。結婚したいんだ、彼女と。

精子くんA・B だいじょうぶ、だいじょうぶ。

精子くんA きつとうまくいくさ。

精子くんB さつきだつて彼女、断らなかったじゃないか。

玉虫 …… そうかな。

精子くんA そうだよ。

精子くんB 脈はあるんだよ。

玉虫 …… 彼女を…連れて帰りたいんだ。東京に出てきてから、いつかそうしたいとずっと思ってた。いつか、心が通じ合える女性を連れて、田舎に帰るんだつて。そんなふうに思えた女性は彼女が初めてなんだ。わかるだろ？

精子くんA・B わかる。

玉虫 もともと、ずっと東京で暮らそうなんて思ってたなかった。都会のペースは僕には合わないんだ。そりゃあ、まわりと合わせて、うまくやっていくことはそんなに難しくはなかった。でも…

精子くんB どこか淋しい。

精子くんA ここは本当は自分がいたい場所じゃない。

玉虫 そうなんだ！…まわりが楽しそうにやってること、大事だと思ってること、どんな店ができた、あの映画はよかった、あの車が欲しい、この仕事がいやだ…、僕は同じように笑ったり考えたりしながら、でもホントはちっとも実感がわかない。そんなことはどうでもいいと思ってる自分がある。だから、なんか…なんていつか…

精子くんB 孤独を感じるんだね。

玉虫 そう…そうなんだ。

精子くんA だから君は彼女に惹かれる。

玉虫 きつと彼女とならやっていける。黙っていても、よけいな話をしなくても、何かを感じて、わかりあえる、そんな気がするんだ…。

精子くんB 得難いパートナーだね、それは。

精子くんA がんばれ。

精子くんB きつとうまくいくよ。

精子くんA 念じるんだ。

精子くんB 君は彼女を手に入れる。

精子くんA 君は彼女とつがいになれる。

精子くんB そして子供が生まれ、君と彼女は新しい家族を作る。

玉虫 子供が…うん、でも、彼女が子供欲しくないっていつんだったら、別に作らなくてもいい。僕は彼女がいてくれればそれでいいんだ。

精子くんA・B …。

精子くんB いや、それは…どうかなあ…

精子くんA 子供は…ねえ

精子くんB いたほうが…いいよねえ。

精子くんA・B いたほうがいいよ。

玉虫 そりやもちろん、彼女が欲しいっていえば僕だって。でもそんなことはどうでもいいんだ。僕は彼女が

精子くんA・B いたほうがいいよ。

玉虫 …えっ、ていつか、あんたたち、誰？

精子くんA いや…誰っていつか…。

精子くんたち、長い鞭毛を示してみせたりして、わからせようとする。

玉虫 …なに？

精子くんB なにっていつか、つまり、

精子くんA (ポーズをとりながら) D…。

精子くんB (ポーズをとりながら) N…。

精子くんA・B (きめ) A。

玉虫 …。

精子くんたち、わからせようとするのを諦めて、

精子くんA うん、まあ、いいか。

精子くんB とにかく君のことを応援しているから。

精子くんA ファイト。

精子くんB ガッツ。

玉虫 あ、ちよっと。

精子くんA・B (振り返り)(子供はいたほうがいいよ。

精子くんたち退場。

玉虫、追う。照明戻る。

玉虫、今のはなんだったんだ、という感じで退場。

ACT.3 小見山

学校の生徒指導室のようなくら。
教師小見山と生徒島村早紀。

小見山 なあ島村。

早紀 はい。

小見山 先生は悲しい。

早紀 はあ。

小見山 俺はな、おまえのことは特別に目をかけていたんだぞ。

早紀 そうなんですか。

小見山 そうだ。素直で、先生の言うことをよく聞く。いいやつだ。おまえはいいやつ。そのおまえが…。

小見山、おおげさにため息。

早紀 あの…

小見山 島村。いやさ、島村早紀！

早紀 …はあ。

小見山 先生には全部わかってるんだ。確かにおまえの家庭は母子家庭だし、いろいろつらいこともあるかもしれん。しかしな、島村。いやさ島村早紀！

早紀 …。

小見山 おまえがそんなやつだとは思わなかった。

早紀 そんなやつって…どんなやつですか？

小見山 おまえは…おまえというおまえは…

小見山、長い長いため息。

早紀 あの…ゼンゼンわからないんですけど。

小見山 早紀！ 俺はおまえを助けたいんだ。どつだ。どつ思う。

早紀 …。

小見山 どう思うんだ！

早紀 なにを。

小見山 俺をどつ思う！ 俺はどんな男だ！

早紀 …。

小見山 立ち直るつ。いつしよに立ち直っていつ！

小見山、熱烈に早紀の手を握る。

早紀 あ。あのつ。

小見山 だいじょつぶだ。だいじょつぶ。

小見山、早紀を抱きしめようとする。

早紀 あつ。先生！ ちよつと！

小見山 なつ、頼むよ、頼む！

もみ合いの末、ようやく逃れる早紀。

小見山 …(ぜいぜい) 島村。いやさ早紀。早紀ちゃん。

早紀 …(ぜいぜい)

小見山 確かに今のは先生少々突然だった。先生は今少々反省している。

早紀 …。

小見山 先生は先月車を買った。

早紀 …。

小見山 どうだ。どうなんだ。

早紀 なにが。

小見山 車で場所を変えていこうじゃないか。そしてやり直すんだ。

早紀 なにをやり直すんですか。

小見山 今の続きをだ。

早紀 いやですよ！

小見山 なんだだ。俺はな、早紀ちゃん。おまえのことが…おまえのことがこんなに好きなんだ！

早紀 …いや、だって…困りますよ！

小見山 車で場所を変えていこうじゃないか。

早紀 いやです。

小見山、大きくため息。そして深呼吸。

小見山 だいじょうぶだ。

早紀 なにがっ？

小見山 俺はな島村、小竹向原先生の手帳を見たんだぞ。

早紀 はあ？

小見山 しておまえがいけないことに手を染めていることを知った。手を染めているどころじゃない。どっぷりと、どっぷりと腰まで浸かっている！

早紀 …なにが？

小見山 腰まで…どっぷりと…どっぷりと…(どっぷり)手で腰のラインを作っている(この腰かっ！

(タックル)

早紀 わっ。

小見山 むっつっ！

早紀 やめて！ 先生！ ちょっと！ いやだってば！！

小見山、突き飛ばされ、床にコロコロと転がる。

小見山 (起きあがる) だいじょうぶだ。

早紀 だからなにがっ！

小見山 ケガはないぞ。先生今柔道で受け身をやったからな。

早紀 だいたいその…なんですか、小竹向原先生の手帳って、なんのことなんですか！

小見山 刑事が来て先生の持ちものを持っていったんだ、だけど先生その前にこっさり抜き取っておいたんだ。これだ。(手帳を出す)

早紀 …。

小見山　そこまで言えばわかるな？　小竹向原先生から怪しい薬をもらっていた生徒のクラス氏名出席番号。ぜんぶ書いてあるんだぞ。

早紀　うそっ。あたしそんなこと、

小見山　まだシラを切るか。先生はな、先生は車も買った、アプトロニックもやっっているんだぞ！

小見山、早紀に再度飛びかかる。早紀逃げる。

そこへ春子登場。

春子　あ。

小見山　…。

春子　あ。これはどうも。おじゃまでしたでしょうか。

小見山　…。

春子　なにか、悲鳴の声のような、声が、いたしました。これは、すわ。なにことか。と思ひまして。

小見山　…。

春子　あ、えー、島村さん。

早紀　…。

早紀、春子の後に隠れるように回る。

春子　あ。うん。島村さん。

小見山　…。(春子の腕にすがる)

春子　あ。だいじょうぶ。だいじょうぶ。うん。

小見山　…。

春子　あの、こ、小見山先生。これはあの、どういった…その、どういった種類の、その…えー、あ、

小見山、まったくしらっとして顔色ひとつ変えていない。

春子　どういった状況か、はかりかねるのですが、えー、なにぶん、穩便に、

小見山　長谷川先生。

春子　はい。

小見山　わかっていただきましたんですが、これはたいへん微妙な問題なんです。島村は僕の生徒だ。僕は担任です。島村は僕のものだ。僕には責任があるんです。

春子　は、それは、まったく、ええ、

小見山　じゃあ島村、話の続きは今度ゆっくり、場所を変えて聞くからな。今日はもう帰りなさい。

早紀　…。

小見山　帰りなさい。これから先生同士ちょっと話があるから。

早紀、小見山と春子を見比べているが、

早紀　先生さよなら！

走り去る。

春子　あ、さ、さようなら…

小見山と春、二人きりになる。

春子 あ、今のはいったいあの、ど、どういった…

小見山 いやあ長谷川先生、しかしつくづく思っんですが、

春子 はい、

小見山 いや、あなたの授業についてなんですがね。授業研究の時に一度拝見しましたし、先ほどもチラチラと。

春子 あ、あの、まことに…不手際で…あの、三年の授業はなにぶん初めてで、その、なるべく早く慣れるようにして…

小見山 あ、いやいやいや、そんなことじゃないんですよ。確かに僕のクラスは進学・就職混合組だし、ちよつと癖のあるクラスなんで、慣れないとたいへんなのはよくわかります。

春子 は、あの、そう言っていただけと…

小見山 三年とか受験組とかそんなことじゃなくてね、私思っんですけど…

春子 はい。

小見山 あなたよく教師になれましたね。

春子 …

小見山 生徒がブーイングしてた訳が実によくわかりましたよ。いやあ、ホント、よくなれたなあ…。

春子 …。

小見山 あなたね、学校より病院行ったほうがいいですよ。だっておかしいもの、様子が。

春子 …あ、あの…

小見山 さつきも廊下で聞いてて思わず吹き出しちゃいましたよ。あれ、わざとやってるんですか、ひょっとして。

春子 い…え…あの…

小見山 ある意味オリジナリティがありますよ。不条理芝居みたいで。今まで先生が一年しか持たされなかった理由がよくわかりました。

春子 …

小見山 あなた、なんで教師なんかになったんですか。

春子 それは…あ…

小見山 生物が好きなんですか。

春子 …。

小見山 ふっん。だけどね、生徒のなかにも生物が好きになる可能性持つてる子がいるかもしれないわけですよ。みんな生物、嫌いになっちゃいますよね、あなたの授業受けたら。

春子 …。

小見山 いいんですかね？

春子 …あの…なるべく…

小見山 なるべく、なんででしょう。

春子 …どりよく…して…

小見山 まあ、なるべく受験組の内職の邪魔にならないように授業してください。あの子たちも人生かかってますから。それじゃ帰ります。よろしく。

小見山、さっさと退場。
 春子、一人残る。
 明かり変わる。
 卵子ちゃん、登場。

卵子ちゃん 元気出そう。

春子 ……。

卵子ちゃん だいじょうぶだから。

春子 ……あの…

卵子ちゃん なにも言わなくてもいいんだ。ぜんぶ分かってる。

春子 ……。

卵子ちゃん だってほら、君の半分は僕なんだから。

春子 ……。

卵子ちゃん 君がお父さんとお母さんからもらったもの。その半分が僕なんだよ。僕…っ

ていうか、「僕」なのか「あたし」なのかまだ決まっていけないけどね。

春子 ……わたし…わたしは…ちゃんと…ほんとに…

卵子ちゃん わかってる。落ち着いて。なにも言わなくてもいいんだよ。ちゃんとわか

かっている。君はちゃんとやりたいんだね。ホントに、心の底からそう思ってるん

だ。でもいつも失敗してしまう。情けない。どうしてこんなに駄目なんだろう。

どうしてちゃんとできないんだろう…。

春子 ……。

卵子ちゃん だいじょうぶ。きつといつかちゃんとできる日が来るよ。それまで何度で

もやり直せばいい。やり直すのに疲れたら休めばいいんだ。

春子 ……。

卵子ちゃん いいね？ 焦らないで。焦らないで。

春子 あなたは…誰？

卵子ちゃん え…誰っ…ていうか……そうだなあ…じゃあ、卵ちゃんって呼んでも

いいよ。

春子 どこかで、会ったことある？ あなたと…

卵子ちゃん ……。

春子 会ったことがあるような気がするの。

卵子ちゃん うん、まあ、毎月会ってる、といえは会ってるかも…。

春子 あなたは…いなくならない？

卵子ちゃん いなくならないよ。君がどこにいてもね。

春子 ……。

春子、卵子ちゃんに肩を抱かれて目を閉じる。
 暗転。

ACT.4 美加

菜津実の部屋の奈津美。手紙を手にぼんやりしている。
美加登場。

美加 ナツちゃん！ いた！ すこいわよ！

菜津実 なに勝手に入ってんのよ。

美加 それどころじゃないわよ、聞いてよ聞いてよッ。いいことかんがえちゃったのよ
ねッ。

菜津実 どうでもいいけどなんなのその恰好。

美加 いいでしょコレ！ 作ったの。

菜津実 …。

美加 そんなことよりね、あたし考えたんだけどさッ、やっぱりあなたのオトコ嫌いに
はなんか精神的な原因があると思うのよね、あたしとしては！

菜津実 なんの話よ。

美加 なんなのそのクールな反応。もう、もっと激しい生き様を晒していきましようよ
お互い。のっていきましようよ！

菜津実 …はあ。

美加 わー…のりのり…。まいいわ。とにかくねッ、精神の根っこのほうに植えつけら
れたものがあるわけよ！ だからせっかくの玉ちゃんのプロポーズも素直に受け
られないわけ！

菜津実 …あなたに言うんじゃないわ。

美加 いいじゃないの、あの子。ちよつと思ひ込みの激しいところあるけどさ。とにかく
くあなたに惚れこんでるんだから。

菜津実 危なっかしくて見てられないんですよ。

美加 それはおんなじことなの！ とにかくあなたの性格じゃこのチャンス逃したらい
つそういう機会がくるかわかんないんだからこの際思い切ってその男嫌いとい
うか異常に人慣れのしない性格を直しちゃわなきゃだめッ。

菜津実 異常で悪かったわね。

美加 いいから聞きなさい！ あたしの見るところじゃあなたはね、ホントはすこく
他人を必要としているの。一方でそういう関係を望みながらも、どうしてもその一
歩を踏み出せない。心のどっかで男を拒否してる部分があるわけよ。

菜津実 してないわよ。

美加 し・て・る・のッ！ 男との関係とか、結婚とか家庭とか、そういうものに拒否
反応を示すなにがが刷り込まれちゃってるわけよ。

菜津実 だったらどうしろっていつの？

美加 そ、こ、で。

菜津実 …。

美加、持参した大きな風呂敷包みを解き、包みのなかから紙芝居セットを取り出す。

美加 刷り込み返す。

菜津実 はあ？

美加 あんたみたいなタイプはいくら理屈で考えても、コトバで言い聞かせても駄目！
そこで、無意識に直接訴えかけようってわけ。…じゃあん。

菜津実 …。

美加 いい？ 素直な気持ちで見なきゃ駄目よオ！

菜津実 …。

美加 それでは始まり始まり。

美加の創作紙芝居が始まる。

美加 「マトリクス」。

菜津実 …。

美加 見た？

奈津美 （見てない）

美加 あそう。よかったじゃない！ 名作よオ。

奈津美 …。

美加 「キアヌ・リーブスはしがないサラリーマン。しかしそれは表の顔。裏では凄腕のハッカー『ネオ』として、夜な夜なサイバースペースを彷徨^{さまよ}うのだった…。

奈津美 …。

美加 そんなある晩。彼のもとに一通の不思議なメールが届いた。それは「

奈津美 ちよつと、ねえ、それ

美加 …なによ。

奈津美 それがキアヌ・リーブスなの。

美加 （絵を見る）そつよ。これ…。（不思議そつに奈津美を見る）…なあに？

奈津美 あ…続けて。

美加 「それは、彼が探し求める伝説のハッカー『x x x』からのメッセージだった」「x x xとの出会い。キアヌよ。この世界は実はマトリクスに操られている。真実を見つめる勇気が君にはあるか」

紙芝居の途中で、素早く紙を出し入れする。

そのたび下にある、抱き合った男女とか、白馬に乗った玉虫とか、幸せそうな男女の絵がチラッと見える。

菜津実 …。

美加、手でサブリミナル効果を入れながら、紙芝居を進める。

美加 「ここに赤い薬と青い薬がある。どっちを飲むか選びたまえ」「キアヌは迷った」

菜津実 ちよつと、ちよつと、それ、

美加 なによオ！ いいところなんだから…

菜津実 それ違うんじゃないの。

紙を抜き損なって、サブリミナルの絵が上に来ちゃっている。

美加、素早くその紙を抜き捨てて、何事もなかったように続ける。

美加 「キアヌは迷った。そして思い切って薬を飲んだ！」

とつとつ菜津実が笑い出してしまつ。

美加 なによあんた…

菜津実 あんたそれ…

美加 なに笑ってんのよ。まじめにやんなさいよ！

菜津実 サブリミナル効果って言いたいの？

美加 …な、なんのこと？

菜津実 全部見えちゃってるんですけど。

美加 …。

美加、しかめっ面で考え込んでいる。

美加 企画倒れか…。

菜津実 (まだ笑っている)

美加 バカ笑い。

奈津美、ようやく笑いをおさめて

奈津美 美加ちゃん。

美加 なによ。

美加 …。

奈津美 あたし、田舎帰るわ。

美加 なによそれ、どついつこと？

奈津美 (そういうこと)

美加 どうすんのよ会社は？ 辞めるの？ 玉ちゃんの玉の輿は？

奈津美 違うわよ。(手紙を見せる) 母親が死んだのよ。

美加 (手紙を見ている)…あらまあ…お葬式。

奈津美 子宮癌。家系ね。

美加 奈津美ちゃん…。

奈津美 迷ってただけど、おかげで吹っ切れた。

美加 そう？ まあ、役に立ったんならいいけどさ…。でもあんた田舎って絶縁状態って言っただけ？

奈津美 そうよ。その手紙だって会社に来た。

美加 お父さんは？ 田舎にいるの？

奈津美 (否定) 母親とは離婚同然。

美加 でもさこれ、喪主お父さんじゃないの？

奈津美 籍は抜かなかつたの。母親はずっと長谷川姓のまま。一人暮らしだったはず。

たぶん父親には連絡がついた、だから喪主は父親。

美加 お父さん会社は知ってたわけだ。

奈津美 入ったときの保証人だからね。でもあの人あたしたちの連絡先までわからな

かった。

美加 …。

奈津美 バラバラなのよ、家族。でも…やっぱり…(手紙を美加から取り上げる) 行かないやね。

美加 うん…。そうよね。

奈津美 でもその前に…。

美加 なによ。

奈津美 もうひとり会わなきゃいけない人間がいるの。

美加 ?

奈津美 …あたしたちって言ったでしょ。

美加 なにそれ誰よ。…あちよつと！ 玉ちゃんの方どうすんのあんだ。

奈津美 (深呼吸) 一度に一つづつ、よ。

奈津美、退場。

美加 ちよつとお！ どこいくのよオ！…ったく。

美加が残り、照明変わる。

美加 (ため息) まったく。なんか思いつくと見境ないんだから…。

卵子ちゃん、登場。

美加 どうしてこんなにお節介焼かっていうんでしょ。

卵子ちゃん …。

美加 あたしはさ、別に人ごとだからどうでもいいけど、なんかあの子には幸せになつてほしいのよね…。

卵子ちゃん、頷きながら美加の話聞いている。

美加 ほら、あの子あたしと同じで、子供産めないでしょ。子宮半分取っちゃったから…。癌じゃなかったんだけど、悪性の腫瘍だね。

卵子ちゃん …。

美加 ずいぶん努力はしたみたいよ。もともとあたしがあの子と会ったのは産婦人科の待合室。その医者あたしの友達でね。あの子は不妊治療ですつとその男のところへ通ってた。あたし？ あたしはホラ、ホルモン注射とかいるいろ…。やあね、昔の話よ(照れる)。

美加、首を横に振る。

卵子ちゃん …。

美加 でも無理だった。どんなにあがいても、半分残った子宮で子供を産める可能性はなかったわけ。あの子は通うのをやめてしまった。そのとき待合室で何度か顔を合わせたのがあの子との縁。おかしなもんよね。あの子の友達ってたぶんあたしだけじゃないかな。子供が欲しくても産めない同士。

卵子ちゃん あの部下の若い子は…

美加 玉虫くんね、どうなんだろ。

卵子ちゃん ずいぶんプッシュしてるじゃないですか。

美加 そうね、彼が救いの主になってくれればいいんだけど。

卵子 彼女の体のごとは…

美加 そりゃ知らないでしょうよ。そんなことペラペラしゃべる子じゃないもの。ほとんど誰も知らないのよ。彼女が東京にできて、たしか当時高校生だった弟だか妹だかと暮らしているときの話だから。親でさえ知らないの。玉ちゃんに言つといたらこれからね。

卵子ちゃん 彼女も彼のことは気にかけてるんでしょ。

美加 そりゃあんた程度の問題よオ。だいたい他人のこと道端に落ちてる犬のウンコく
らいにしか思っていないんだからあの女は。

卵子ちゃん 玉虫くんも？

美加 彼はまあ、乾いてて踏んじゃってもたいしてダメージのない犬のウンコってこと
じゃないの。

卵子ちゃん ……(あなたは？ という視線で美加を見る)

美加 あたし？ あたしの場合ほら、乾きぎつて臭いも抜けててまるでオブジェの
ようなクリエイティブなウンコ、ってなに言わせんのよ誰がウンコなのよ！

卵子ちゃん 踏みつぶすには惜しいってことだ。

美加 ウンコの話はどうでもいいのよ。ていうかあんた誰よ。えっ。ちょっとなんであ
たしとあんたとハナシしてんの？ なに？ あんたどっから出てきたの。

卵子ちゃん 見てわかりませんか。

美加 ……ぜんぜん。

卵子ちゃん 卵子です。

美加 ……。

卵子ちゃん らんし。

美加 らんし？

卵子ちゃん らんし。

美加 ……え、え？ どういうこと？ 卵子に

卵子ちゃん いや、どういこうっていうか…

美加 卵子になりたいの？

卵子ちゃん なりたくないじゃなくて、卵子だから。

美加 ……(まじまじと卵子ちゃんの顔を見て)イヤあ…。…気持ちわるーい…

卵子ちゃん なんですか。失礼な。

美加 ……(卵子ちゃんの身体に触ってみる)人間じゃん。

卵子ちゃん そりゃ人間ですよ。DNAですもん。

美加 はあ？

卵子ちゃん 詰まってるんですよ、ちゃんと。情報が。

美加 うわあ、もう、すっごい気持ち悪い。

卵子ちゃん ……。

美加 吐きそう。こっち見ないで。ああいやだ。

卵子ちゃん いや、あの、

美加 おおやだ、こないで！ ついてこないで！

美加、いやだを連発しながら退場。
卵子退場。

卵子 ……。

ACT.5 産婦人科医

須藤産婦人科。
須藤医師登場。
電話鳴る。

須藤 …はい須藤産婦人科。ああ、おまえか。なんだ、どうした。なにが？ 駄目だよ。…日にちが決まってるんだから。駄目だって。だからおまえが二十歳になったらいくらでも自由に会えるさ、それまではそんなに簡単に会えないんだよ。…え、曲げて？ 曲がないんだよ。なに？…どこにいるって？

チャイム鳴る。

須藤 はい！…あのな、ちょっと客が来たから。またかけ直してくれ。いや、駄目だつて。…もしもし？ ももしし？

奈津美、登場。

須藤 …。

奈津美 …。(ほほえんで会釈)

須藤 (受話器置く)…どうも。

奈津美 ご無沙汰しています。

須藤 ええ。おかけになりますか。

奈津美 いいえ、ちょっと寄っただけです。先生の顔を見に。

須藤 そいつはどうも…。驚きましたよ。正直言つて。

菜津実 …。

須藤 お変わりありませんか。

菜津実 なんとか。

須藤 なによりです。

菜津実 先生も、変わりませんね。懐かしいわ、この診察室。

須藤 …続けてらっしゃるんですか、射撃。

菜津実 ええ。

須藤 そうだ、去年のオリンピックには…

菜津実 (笑う) 先生相変わらずだね。

須藤 …。

菜津実 オリンピックは^{おとし}一昨年です。

須藤 ああ。あの…オースト…リア…リア？

菜津実 ラリア。ええ、行きましたよ、シドニー。

須藤 そうですか、いや、お元気で活躍なによりです。

菜津実 ありがとうございます。

須藤 …。

菜津実 そんなに神秘的な顔しないで。

須藤 いや…申し訳ない。

菜津実 なんだか緊張してますね、先生。

須藤 正直言つて、してますね。…僕が緊張する相手はこの世ではあなたくらいです。

菜津実 どうして？

須藤 いや、どうしてってこともないが…。やっぱりおかけになりませんか。

菜津美 …。(座る)

須藤 ずっと気になってたんですよ。あなたを治せなかった。

菜津美 先生のせいじゃありません。

須藤 あなたに…余計な希望を持たせて、かえって苦しい思いをさせた。

菜津実 否定はしません。だって…

須藤 …。

菜津実 あなたはきっと誰が否定しても納得しないでしょ？

須藤 …ええ、しませんね。

菜津実 今でも、信じてらっしゃいます？ わたし、子宮を取らなくても治せたって？

須藤 …。

菜津実 わたし、須藤さんの誠意は疑ってません。子宮を半分なくした女が子供を産める可能性を探して、一年も頑張ってくれた…。結果はどつあれ、わたしのことを考えて、正しいと思うことをしてくださったと思ってます。

須藤 …。

菜津実 もう行きます。

須藤 …。今のことを言いこ？

菜津実 …そうかも。この街まで来て、ふと先生のことを思い出したんです。

須藤 どちらへ？

菜津美 …。

須藤 いや、立ち入った質問でした。

菜津美 …母が死んだんです。

須藤 …。

菜津美 子宮癌。それで…

須藤 はい。

菜津美 帰る前にどうしても会わなきゃいけない相手がいるんです。

須藤 …。

菜津美 それじゃ。

須藤 会えてよかった。

菜津実 それじゃ、お元気で…。

須藤 お元気で。

菜津実、退場する。

須藤、息を吐き出す。戻りかけるとチャイムの音。

須藤、慌てて戸口へ引き返す。

早紀登場。

須藤 …。

早紀 来ちゃった。

須藤 来ちゃったら駄目なんだ。

早紀 ごめん。

須藤 …。

早紀 だいじょうぶだよ。お母さんには黙ってるから。

須藤 そっという問題じゃない。

早紀 ごめん。…ねえ、今の女の人患者さん？
 須藤 ええ？ 違うよ。
 早紀 まさか、恋人？ お父さん結婚するの？
 須藤 バカ。元患者だ。そんなことより、あのな早紀、おまえと会えるのは月に一度、毎月第三土曜日の午後一時から午後四時までって、そういうふうに決まってるんだ。

早紀 だって先月会わなかったよ。

須藤 有給休暇じゃないんだから。先月はおまえ中間試験だったんだろ。

早紀 その前も会わなかったし。

須藤 別に会わなきゃいけないってわけじゃない。会う権利があるってだけだ。

早紀 …。

須藤 おまえが小さいころならともかく、毎月毎月会ったって…

早紀 お父さんあたしのこと心配じゃないんだ？

須藤 そうじゃない。おまえはもう立派な大人だって言ってるんだ。

早紀 …。

早紀、椅子に座る。
 その様子を見て

須藤 元気か？

早紀 うん。

須藤 お母さんは？

早紀 元気だよ。

須藤 そうか。

早紀 …。

須藤 で…なんかあったのか？

早紀 …。

須藤 …お母さんに言えないようなことか？

早紀 ……。

須藤 言ってみろよ。

早紀 ……うん…どうしようかな…

須藤 話したくて来たんだろ。

早紀 そうなんだけど…お母さんに黙っててくれる？

須藤 ああ。

早紀、学校での出来事を父親に話し出す。
 照明の変化。時間の経過。

早紀 とまあ…そんなような…ことかな。

須藤 …(ため息)

早紀 怒った？

須藤 …。おまえ、それで、本当はどうなんだ？

早紀 なにが…

須藤 貰ってたのか、薬。その先生から。

早紀 (首を横に振る)

須藤 本当だな？

早紀 …。
 須藤 早紀。
 早紀 本当。
 須藤 …じゃあなんでその手帳にオマエの名前が書いてあるんだ。
 早紀 わかんない。
 須藤 じゃあなにか、担任の先生が嘘ついておまえに言い寄るネタにしてるってことか。
 早紀 わかんない。
 須藤 …どうなってんだ、最近の学校は…。じゃあおまえ、どうしろっていうんだ。
 早紀 お父さん、先生に会ってくれないかな？
 須藤 俺が？ 俺は…、俺が？
 早紀 だってこんなことお母さんに言えないもん。
 須藤 そりゃあ…言えないだろうな…。いや、だけどな早紀、俺はおまえの教育には口出せないことになってるんだよ。
 早紀 なんだ？
 須藤 離婚のとき裁判でそう決めたからだよ。
 早紀 あたしが頼んでも駄目なの？
 須藤 おまえが未成年のうちには駄目だ。
 早紀 ……そこを…そこを曲げて。
 須藤 曲がないんだよ。それ流行ってるのが。
 早紀 ……マイブーム。
 須藤 …。
 早紀 一生のお願い。
 須藤 …。
 早紀 お母さんに内緒でこっそり先生に会ってほしい。
 須藤 そりゃあ…そりゃあおまえが困ってるんならなんとかしてやりたいよ。…けどな、もしそのおまえの担任の…なんてったっけ
 早紀 小見山先生。
 須藤 小見山先生がその気になったらそれこそお母さんに告げ口することもできるわけだろ。そしたらどうする。
 早紀 …お母さんに知られたくない。
 須藤 その先生に直接じゃなくて、もっと偉い先生に頼むとかできないのか、教頭先生とか校長先生とか…
 早紀 …わかんない…。
 須藤 いないのか、おまえのことを助けてくれそうな先生が。
 早紀 …。(思いつく) (思いつく)
 須藤 …。(思いつく) (思いつく) その生物だか物理だかの…
 早紀 生物。
 須藤 その先生はどうだ。
 早紀 うん…ちょっと頼りないけど、相談には乗ってくれるかもしれない…
 須藤 じゃあまずその先生に話してみるっていつのはどうだ。
 早紀 お父さん会ってくれる？
 須藤 お父さんっていつな。
 早紀 会って話してくれる？

須藤 ああ。わかった。

早紀、父親に抱きつく。

須藤 よせよせ……。じゃああれだ、詳しいことは明日話そう。今日もう遅いから。

早紀 明日来てもいいの？

須藤 ああ、第三土曜日だからな。

早紀 憶えてたんだ。

須藤 当たり前だ。じゃあな。

早紀 うん。ありがとう。

早紀退場。

精子くんB、登場。

精子くんAのかぶりものを持っている。

精子くんB ……や。

須藤 ……誰ですか。

精子くんB 迎えにきたよ。

須藤 なに言ってるんだ？

精子くんB 次コレだから。

精子くんB、退場。

須藤 いや、おい、ちょっと待て！ 次ってなんだ？ おい！

須藤追って退場。

ACT.6 小見山・姉妹

春子の部屋。春子がひとり。

金魚に餌をやる。

金魚に向かって授業の練習などをする。

春子 みなさん、皆さんは生まれたときから水の中で暮らし、鰓呼吸をし、尾びれや胸びれをはたはたさせながら勉強に勤しんでこられたことと思います。なぜ、自分たちは水のなかで生きているのか？ なぜ、ご飯はいつも上から降ってくるのか？ なぜ自分たちには鱗があるのか？ なぜ、赤いのか？ 皆さんが生物を勉強するということは、そういう疑問を、ひとつひとつ解いていくということなのです。今日はその第一歩として、みなさんの本当の名前をお教えします。皆さんは、コイ目コイ科フナ属に属しています。キプリノフォルムス・キプリニータ・カラシウス・アウラトウス。じゃあ一緒に。キプリノフォルムス・キプリニータ・カラシウス…

ノックの音がする。

春子 …。

ノックが続いている。

春子、立ち上がって、うろたえる。

春子 …。

ノックがしつこい。

春子、戸口に立って、

春子 誰ですか…。

小見山の声 長谷川先生。私です。小見山です。

春子 …。

ドアあける。

小見山 …。

春子 あ、あの、なん、なんでしょう…。

小見山 すぐに帰ります。ちよっとお話が…。

春子 あ…。

小見山 お願いします。

春子 …。

小見山 お願いします。

春子 …。

小見山 お邪魔します。

小見山、入ってくる。

春子 あの、どござお座りください。

小見山 (座る) あ、これ。お土産です。

春子 え、あ

小見山 あ、金魚ですか。
春子 はい。

やや沈黙。

春子 わ、わたし、授業は…反省、わかりやすくしていきますので、あの、
小見山 長谷川先生。先日はあんなことを言ってしまったって本当にすみませんでした。
春子 は。

小見山 気が動転していたんです。あんなひどいことを…、本当に、すみません。僕は
我が身可愛さに先生の心を傷つけてしまった。

春子 あ…いえあの…

小見山 先生の授業は立派です。先生の教科に対する愛情が伝わってくる、とっても暖
かい授業です。それは必ず生徒にも伝わるはずですよ。

春子 …

小見山 長谷川先生、いや春子さん！ 春子さんと呼んでもいいですか？

春子 あの…「ハ」随意に…

小見山 春子さんは素晴らしい女性だ。それは…それは教師としてだけじゃない。女性
としても素晴らしいです。本当に、僕はずっとそう思ってきました。

春子 …え

小見山 僕は同じ教師として、先生に嫉妬していたんです。それであんなひどいこと
を…。どうかわかってください。

春子 は…あの…それでは…あれは

小見山 はい。

春子 島村さんの…あの…

小見山 …とつさに彼女を傷つけずに済ませるにはああするしかなかった…。でも僕は
春子さんに誤解されたままにいることは耐えられない。…島村が…僕に迫ってき
たんです。

春子 え

小見山 おわかりでしょう？ あの年頃は教師に男性としての興味を持つことがままあ
ります。島村は父親がいない。僕を慕うあまり…彼女は僕に、その行為を迫って
きたんです…。

春子 …え、でもあの…

小見山 もちろん僕は受け入れなかった。でも彼女は強引に迫ってくる。僕はこう、床
に引き倒されて…。先生が入ってきてくれてよかったのかもしれない。

春子 …。

小見山 春子さん。

春子 はい。

小見山 メガネをはずしてくれませんか。

春子 はいや、あの

小見山 お願いします。

春子 …(外す)

小見山 …やっぱりだ…。あなたは…キレイだ。

春子 …

小見山 春子さん！

小見山、飛びつく。
床の上を転がる。

小見山 春子さん！ いやさ春子！

春子 あの…あの…

小見山 こんなに…こんなに好きなんだ！

春子 …。

春子、小見山を抱き返す。

ノックの音。

小見山、離れようとする。

春子がそれを止める。

奈津美登場。

小見山、春子から離れる。

奈津美 開いてたわよ、ドア。

春子 …。

奈津美 取り込み中にごめんなさい。

小見山 …。

春子 なにしに…きたの。

奈津美 話があるの。…悪いけど、席外していただけます？

小見山 あなたは…

奈津美 長谷川奈津美。この子の姉です。

小見山 あ。

奈津美 ごめんなさいね。

小見山 …それじゃ。長谷川先生、また。

小見山、退場。

奈津美 久しぶりね。

春子 …帰ってよ。

奈津美 長居するつもりはないわ。これ。(手紙)

春子 …。

奈津美 お母さん。

春子 …。

奈津美 お父さんは帰ってる。あたしも帰るわ。

春子 …帰ってよ…。

奈津美 …。

春子 関係ない！ こんな全然関係ないでしょ！

奈津美 母親が死んだのよ！

春子 それがどうしたのよ！ 関係ない！ 悲しくもなんともない！

奈津美 あんたがどう思おうと知らないわよ！ でもね、母親の葬式ぐらい出たらいいでしょ！

春子 関係ない！ 関係ない！ 関係ない！

奈津美 関係ないわけではないでしょ！ バカじゃないの！ あの人はあなたの母親なの！
どんなに嫌ってようが憎んでようが親なの！

春子 あんただって嫌ってたじゃない！

奈津美 そつよ！

春子 あんただって憎んでたじゃないか！

奈津美 そつよ！

春子 二度と帰らないって言ってたじゃない！ きれい事言っな！ 偽善者！

奈津美 そつよ憎んでたわよ！ 家族なんてどうでもいいって、あんなの家族じゃな
いって今でも思ってるわよ！ それがなに！？ 憎んでたって葬式ぐらい行ける
わよ！

春子 あたしは行かない。

奈津美 あんた全然変わってない…。やっぱり来るんじゃないか。

春子 そう思うなら来なきゃよかったんだ。

奈津美 あんたに知らせるのはあたしの義務でしょ！ あなたの居場所あたししか知ら
ない。どうせあんたが行かないって言うのわかってたわよ。でも知らせるだけは
知らせなきゃって思ったの。

春子 …。

姉妹やや黙る。

奈津美 学校…うまくいってるの。

春子 …。

奈津美 …。

春子 お父さんは…

奈津美 むこうに帰ってるのよ。そうじゃなきゃこれが来るはずないもの。

春子 …。

奈津美 あんた、あの人には会いたくないんじゃないの？ あたしと違ってあんたとあの人は
それほど…ひどくなかったんだし…

春子 ……。お姉ちゃん、責任感強すぎるんだよ。

奈津美 なにが？ ああ、ここに来たこと？

春子 …(うん)

奈津美 どうしようかと思ったわよ。でも、やっぱりね…。お葬式だって、ほつつとこ
うかと思った。帰りたくなんかないし、あの人と顔合わせたくないし、でも…

春子 …なに？

奈津美 ちゃんとしたくなかったのよ。あとで後悔しないようにね。

春子 …なんかあったんだ。

奈津美 …別に。

春子 彼氏ができたんでしょ。

奈津美 なに言ってるの？

春子 わかるもん。

姉妹またやや黙る。

奈津美 …どうなるか、まだ全然わかんないのよ。

春子 そつ…。

奈津美 そつ。

春子 …あたしにも、す、好きな人できたんだから。

奈津美 わかってるわよ、見たから。

春子 こ、小見山さんっていうの。同じ学校の先生。

奈津美 そつ。

春子 そつ。

奈津美 まだ飼ってるのね、金魚。

春子 うん。

姉妹、またやや黙る。
奈津美、立ち上がる。

奈津美 行くわ。

春子 …。

奈津美 …帰らない？ 春子。

春子 …。

奈津美 どうせならふたりで行かない？

春子 …。

奈津美 明日朝十一時の飛行機。これ、あなたのぶんもとっておいた。

春子 …(チケット受け取る)

奈津美 …。

奈津美、春子を見ているが、やがて、退場。
暗転。

ACT.7 葬式

玉虫。

神妙にお焼香をする。

奈津美登場。

奈津美 …。(こっちへの合図)

玉虫 …。(そっちっ)

奈津美 …。(早く)

玉虫 …。(はい、今)

玉虫、立ち上がって奈津美についていく。

玉虫、奈津美再登場。

玉虫 どうもこのたびはご愁傷…

奈津美 なに言ってるんの。いいから、たばこ持ってる？

玉虫 奈津美さんタバコ吸うんですか？

奈津美 ずっと吸ってない。

玉虫 ないです。買ってきますか？

奈津美 いいの、ごめん。

玉虫 …奈津美さん、ずいぶんイライラしてますね。

奈津美 …そう？

玉虫 わかります。

奈津美 …。

玉虫 いやでもびっくりしましたよ、いきなりでしたから。喪服もなしでまずかったですか？

奈津美 …。

奈津美 いいのよ。あたしが無理に連れてきたんだから。

玉虫 言ってくれば持ってきたんですけどね。見送りだと言ってたから…

奈津美 いいのよ、ごめん。

玉虫 あの…ホントは誰か他の人と来るはずだったんでしょ？

奈津美 …。

玉虫 その人が来なかったんで、僕が…

奈津美 玉虫くん。

玉虫 はい。

奈津美 ごめん。

玉虫 いや、いいんです、そんなこと言ってるんじゃない…

奈津美 妹なの。

玉虫 …。

奈津美 でも来なかった。あなたを連れてきたのは…別に身代わりってわけじゃないの。

そんなふう思ったならゴメン。

玉虫 いえ、そんなこと。でも妹さんごうじて…

奈津美 妹のことはいいわ。

玉虫 もしかしてなにかあったのかも…

奈津美 いちおう頼んだから、様子見てきてくれるように。

玉虫 誰に？

奈津美 美加ちゃん。

玉虫 ああ。

奈津美 だから、だいじょうぶ。それより…玉虫くん。

玉虫 はい。

奈津美 さつきお焼香のとき、お棺の横にいた男。六十くらいの、メガネの。

玉虫 ああ、はい。

奈津美 父親よ。

玉虫 …（頷く）

奈津美 これからたぶん話をするけど、そばにいて。

玉虫 …

奈津美 あたし、興奮するかもしれない。なるべく抑えようとは思ってるけど。自信ない。

玉虫 嘘でしょ？ 奈津美さんが…自分を抑える自信がない？

奈津美 ないの。それと、あなたも抑えてね。傲慢な男で、聞いていて腹が立つかもしれないけど。

玉虫 はい。

奈津美 ずっと会ってなかったから…。よくある話だけどね、仕事で家族を振り回して、酒で家庭を駄目にして…。陳腐な話だけど…、ひどかった。あたしも妹も逃げ出してきたの。それ以来…。

玉虫 そうだったんですか…。

奈津美 …あたしね、子宮が半分ないの。

玉虫 …。

奈津美 子宮筋腫でね。もう八年前になる。お医者さんは取ったほうが安全だって言った。でもその後、本当は取らなくても治せたんじゃないかってずっと思ってた。違う病院で見てもらって、妊娠できる可能性がないか、本当に子供が産めないのかどうか、調べて貰った。結果は…ノー。

玉虫 …。

奈津美 だからあたし子供作ることできないの。そのことをあなたに言わなきゃいけないと思った。

玉虫 …。

奈津美 それでもいいかって今あなたには聞かない。それって卑怯でしょ？…よく考えて。考えて欲しい。それからあたしと…まだ結婚する気があったら、そのときもう一度プロポーズして。そうじゃなかったら、何も言わないで。

玉虫 …。

奈津美 わたしの言ってること、わかる。

玉虫 …はい。

奈津美 わたしはあなたの答えを待たないから。

玉虫 …。

奈津美 あなたもわたしがあなたの答えを待ってるって思わないで。

玉虫 …。

奈津美 わたしの言ってることわかる？

玉虫 …はい。

奈津美 …。あなたのプロポーズ、うれしかった。

玉虫 …。

喪服の父登場。
奈津美、玉虫の手を一度ぎゅっと握る。

父親 奈津美…。

奈津美 …。

父親 久しぶりだね。

奈津美 ええ。

父親 元気なのか？

奈津美 ええ。

父親 春子は…来なかったのか。

奈津美 …ええ。

父親 …そうか…元気なのか？

奈津美 わたし、お母さんのお葬式に来たの。あなたと話をするために来たんじゃない。

父親 …うん。わかっているさ。

奈津美 なにがわかってるっていうの。

父親 おまえたちが…俺のことを恨んでいることをだ。

奈津美 恨んでないわ。

父親 …。

奈津美 恨んでなんかいない。あなたは家族をバラバラにした。あたしたちは…失敗しただけ。

父親 奈津美…

奈津美 家族を作るのに失敗しただけ。あたしたちはバラバラになって、それぞれ生きてるだけ。憎んでも恨んでもいない。それでいいじゃない。

父親 …奈津美。

奈津美 …。

父親 オリンピック、見に行ったんだよ。

奈津美 …。

父親 母さんも誘ったんだが…(来なかった)、惜しかったな。

奈津美 なんて離婚しなかったの？

父親 …。

奈津美 お母さんの浮気を理由にすれば簡単に別れたはずでしょ？ 認めたくなかったんでしょ？ 自分が家族を守ることに失敗したこと。だからお母さんを縛りつけた。

父親 そうじゃない…

奈津美 でもあの人がおかしくなったのはあなたのせいじゃない！ あなたの仕事と、あなたのお酒と、あなたの…！

父親 奈津美。すまなかったよ。

奈津美 …。

父親 おまえが…おまえたちと会ったら、言おうと思っていた。

奈津美 …。

父親 すまなかった。

奈津美 …。

父親 それだけいいかった。春子にも、そう伝えてほしい。

奈津美 いまさら…家族が大事になったってわけ？

父親 そうかもしれない。できることならやり直せばいいと思ってる。

奈津美 いまさら…

父親 わかっている。だからせめて…おまえは失敗しないでほしい。

奈津美 …。

父親 ここに帰ってきて、母さんの顔を見て、思ったよ。私が死ぬときに、もしおまえに子供がいて、その子供が生きていてくれれば、その子供がまた子供を作って、そうやってずっと命が続いていてくれれば…そう思いながら死ねれば…ってね。

奈津美 あたしは…

父親 母さんが生きてるうちに…気がつけばよかったんだ。

奈津美 …ふざけないでよ…なに言ってるのよ…いまさら…！

玉虫、進み出て奈津美の肩を抱く。

玉虫 お父さん。

父親 …。

玉虫 初めまして。奈津美さんと同じ会社にいます、玉虫晋作と申します。

父親 長谷川です。

玉虫 実は奈津美さんと結婚したいと思っています。まだ奈津美さんの承諾は得ていませんが、何度でも申し込むつもりです。

奈津美 …玉虫くん

玉虫 もし奈津美さんがOKしてくれた暁には…どうかよろしく願います！

玉虫、頭を下げる。
暗転。

ACT.8 精子くんたち

精子くんA(登場)、精子くんC、精子くんD。
会合。

精子くんA 待った？

精子くんC ずっと待ってる。

精子くんD どうも。

精子くんA あれ。

精子くんC 新顔。

精子くんA よろしく。(握手)

精子くんD どうもどうも。(握手)

精子くんA で、どうなの？ 見通しは。

精子くんC いやあ、前途多難みたいよ。

精子くんA あ、そう。

精子くんD 駄目なの？

精子くんA いちおう相手はいるみたいなんだけどね。

精子くんD うまくいってないんだ？

精子くんC 割とね、フォーマルというか、身持ちが堅いというか、…

精子くんA プロポーズの段階。

精子くんD 婚前交渉なし？

精子くんA まあ、無駄打ちされるよりもいいのかもしれないけど…

精子くんC あんまり遊ばないしね、彼。

精子くんA うん、今時珍しい。

精子くんD 性欲が薄いつてこと？

精子くんA どうかなあ、健康ではあると思うんだが…

精子くんC 時々夜中に仲間が減ってたりするから…

精子くんA そう。

精子くんC まあ、なんと言っても待つしかないんだけどね。

精子くんA 君、ちよっと顔立ち変わってるね。

精子くんD そう？

精子くんA まあ、変わってるよなあ。ここんところ、ほら。

精子くんC ほんとだ。

精子くんA これ、ここ、父方？

精子くんD うん、そうかな？

精子くんB ああここ、A、T、T、G、Cときて、

精子くんA・B A。

精子くんA だもんなほら。

精子くんB 俺らほら、二人ともここ、母方だから。ここシトシンの次、ね、グアニン。

精子くんA グアニン。

精子くんD ホントだ…。(気にする)

精子くんB …ま、気にするなよ。

精子くんA まあ、そりゃそれぞれ個性があったっていいよな。

精子くんB そうそう。それが生き残る上では利点なんだから。

精子くんD そうかな…。

精子くんA・B そうそう。

精子くんD …。(慰められてやや安心)

精子くんA それ、劣性だよ。

精子くんD …。

精子くんたち、ちりぢりに退場。

ACT.9 須藤

車の止まる音。
車のドアの音。

春子のアパート前。
春子登場。

春子 今日のはあの…送っていただいて…どうも。え、はい。え。しゃ、しゃべり方が…。
すみませ…。はい。……………うん。わかった。ありがとう。…荷造りは…済んでる
から…。じゃあ今夜。

春子、メガネを取る。キス。抱擁。
車のドア、発車。
春子、唇を舐めながら手を振る。
華美な服装の美加登場。
春子、登場。

春子 …。
美加 あのー。
春子 …は。
美加 怪しいモノじゃないのよ、あの長谷川先生？
春子 …（警戒）
美加 長谷川春子先生でよね？ ちょっとお話よろしいかしら？
春子 ど、どなたですか。
美加 あたし？ あたしこついうモノ。

名刺渡す。

春子 ビューティスタジオ、リバーボトム。
美加 メーキャップ関係のお仕事。いちおう社長なのよお。美加って呼んでね。
春子 美加、さん。
美加 そ。よろしく。
春子 あ、あの、メーキャップは、あまり、しないので
美加 違うの違うの。あのね、長谷川奈津美に頼まれて来たの。
春子 …。
美加 そ、あなたのお姉さん。
春子 …。
美加 そんなに警戒しないで。別にとって喰おつってんじゃないんだから。ちょっとあ
がってもいい？ それともそのへんでお茶でも…。…ちすそつするわ。
春子 …どうぞ。

美加、春子、部屋に入る。
春子の部屋。

美加 あらあ引つ越し？
春子 …はい。
美加 そうなの。すっかり荷造りしてあるじゃない。あとはこの…金魚だけ？

春子 ええ。
 美加 ナツちゃんてねえ、あ、お姉さんのことね。あんまり話してくれないから。きょうだいがいるって知ってたけど、学校の先生だなんて初めてきいたのよね。
 春子 あ、ど、どうして？
 美加 お葬式。すっぱかしたでしょ？
 春子 ……
 美加 別にいいのよ！ 責めてるんじゃないの！ そうじゃなくてね、お姉さん心配してるのよあなたの。だから向こうから電話であたしに、様子見てこいって。それで来たの。なにもなかったんならそれでいいのよ。
 春子 ……
 美加 なにもなかったのよね？
 春子 ……(はい)
 美加 わかった。はいおしまい！ あたしもこれで任務完了。
 春子 あ、の…
 美加 なあに？
 春子 姉さんの友達なんですか？
 美加 そ。あの気難しい女の数少ない友達。
 春子 ……姉さんは…
 美加 あら気悪くした？ ゴメンねあたし口悪いから。
 春子 いいえ。姉さんに…恋人できたんでしょ？
 美加 ええそうね。プロポーズされたみたいよ。
 春子 ……
 美加 あなた姉さんの体のこと知ってるんでしょ？
 春子 ……(はい)
 美加 だから彼女迷ってるのよ、たぶんね。でも…
 春子 でも？
 美加 たぶんうまく行くとと思う。だってお葬式に連れていったのよ、彼のこと。
 春子 ……そう…。
 美加 うまくいくといいわね。でしょ？
 春子 ……(うん)
 春子 ……
 美加 あらう。お客さん。どうしよう帰らうか？
 春子 あ、いえ…
 美加 窓から出ようか？
 春子 どうして…
 美加 だってこんなのにいいいの？
 春子 だいじょうぶ。きつと…
 美加 (表情見て) 彼？
 春子 ……(うん)
 美加 あらあら。ねえひよつとして…。
 春子 ……(照れ)
 美加 彼のところに引っ越すの？

春子 ……(はい)

美加 なによお姉妹そろつてうまくいってるじゃないの！ 春ちゃん！ 春ちゃんて呼んでいいわよね？ このこの！

春子 しよ、紹介…

美加 いいわよお！ そんな…

春子 ちよつと、待つて…

ドア開け。

早紀・須藤登場。

早紀 (ペコリ)

春子 島村さん…

須藤 不躰にすみません。島村早紀の父兄です。先生に折り入ってご相談が…

美加 須藤ちゃん！

須藤 川尻！ おまえなにやってんだ…

美加 なにつて、いやあ。えーと…

春子 あ、あの…島村さんの父兄と言われますと…あの、

須藤 ああ、ええ、あの、父親です。(名刺出す)

春子 あ、あの、離婚された…

須藤 はい。

美加 (独言) あれが娘？ 初めて見た…

春子 あ、お知り合いで…

須藤 ええ、まあ

美加 ええ、ほら、奈津美さんの…

須藤 奈津美さんつて…じゃまさか…

美加 こっちがマカサだわよ！

やや沈黙。

春子 あの、とにかく、どうぞお上がりになってください…。

全員、部屋に入る。

時間の経過。

須藤 とまあ…そういうわけなんです。

春子 ……

須藤 その小竹向原という先生は現在警察に拘留されているわけですよ。で、小見山という先生が娘をどうなさりたいのか、本当にそういう手帳があるならなぜ警察にそれを提出されないのか、そのあたりがどうも…。もしなんらかの悪意があつて…

美加 そりゃ悪意あるわよ！ 決まってるじゃない！ とんでもない先公だわよ！ あらごめんなさいあなたも先生だったわね。だけどそんな卑怯な手で教え子をモノにしようなんて…

須藤 池尻。

美加 その名前呼ばないでって言ってるでしょ！

須藤 ちよつと黙つててくれよ。

美加 ……
須藤 ……学校にうかがうより、個人的にお話を聞いていただきたくて、伺ったんです。しかし…驚きました。奈津美さんの妹さんですか。
早紀 ……お父さん？
須藤 ああ、この先生のお姉さんが昔患者さんだったんだよ。
春子 聞いたこと、あります。姉から、一度…
須藤 そうですか。
春子 もしかしてわたしは子供を産めるかもしれないって。電話で。
須藤 ……
春子 姉のあんな明るい声は初めてでした。
須藤 ……
美加 どうして、希望を持たせて…突き落とすようなことをするんですか？
春子 どうして突き落とすんですか？ それなら、最初から、希望なんてないほうがいい…。
早紀 先生…？
美加 春ちゃん、それは違う…
春子 気安く呼ばないで！
須藤 ……僕の力不足です。
春子 小見山先生は…小見山先生はそんな人じゃありません。間違いです。間違ってます。
須藤 ……
春子 間違ってます。
須藤 しかし手帳が…
春子 その手帳が本当にあるなら、きっと小見山先生は生徒のことを考えて警察に言わなかったんです。わたしは…そう思います。
須藤 しかし娘は…娘の名前がそこに書いてあるはずはないと言ってるんですよ。
春子 ……
須藤 それならどうして小見山先生は娘を？
春子 ……小見山先生は…島村さんのほうから、誘ったとおっしゃっています。
早紀 うそ！ うそです！
春子 ……
早紀 ……先生だって見たじゃないですか！
春子 ……
早紀 ……先生！
須藤 早紀。
美加 春子さん、あなたまさか…
春子 ……
春子、かたくなに黙っている。

美加 須藤ちゃん、ちょっと…

美加、須藤に耳打ちする。

須藤 …。

美加 ここはいつたん引き上げたほうがよくない？

須藤 早紀。おいで。

早紀 先生！ 知ってるでしょ！ だって見てたじゃない！

須藤 早紀、いいからおいで。行こう。

春子 確認します。

須藤 …。

春子 島村さんのこと、わたしが責任を持って小見山先生に確認します。

須藤 …。

春子 必ず。

須藤 わかりました。どうも、おじゃましました。

須藤、早紀、美加、退場。

春子残る。

照明変わる。

卵子ちゃん登場。

卵子ちゃんに黙って抱かれる春子。

ACT.10 姉妹

奈津美の部屋。
玉虫と奈津美。(柔軟体操)

奈津美 ねえ。

玉虫 はい。

奈津美 ……なんでもない。

玉虫 はい。

奈津美 ねえ、あなたホントはあたしのこと田舎に連れて帰ってたんじゃないの？

玉虫 いずれは、と思ってます。

奈津美 ……ふうん。

玉虫 ……うち、山持ってますから。鳥、撃てますよ。

奈津美 鳥なんか撃つてどうするの。

玉虫 ……。

奈津美 残念ね。あたしまだ仕事やめたくないから。

玉虫 いずれは、の話ですから。

奈津美 ……。

玉虫 奈津美さん？

奈津美 なあに。

玉虫 結婚式、どんなのがいいですか？

奈津美 あなたは？

玉虫 僕は、あなたがよければなんでも…

奈津美 そうねえ…。痛い痛い。

玉虫 シツレイ。

奈津美 ……チャペルね。

玉虫 なるほど。…意外と普通だ。

奈津美 黒いチャペル。

玉虫 え？

奈津美 そして真っ黒なウエディングドレス。いいわあ…

玉虫 ……美加さんなら喜びそうですね。

奈津美 「冗談よ。」

玉虫 安心しました。

奈津美 なんでもいいわ、結婚式なんて。

玉虫 じゃ、行きますか、走りに。

奈津美 途中でへばらないですよ。

玉虫 だいじょうぶ！

やや沈黙。

玉虫 食べるんですよ。

奈津美 なに？

玉虫 鳥。うちの方じゃ撃った鳥は食べるんです。

玉虫退場

奈津美 …悪くないか。

奈津美退場しかけ、美加登場。

美加 ナツちゃん、いた！

奈津美 どうしたの。

美加 たいへんよ。今須藤ちゃんから聞いたんだけど…

奈津美 どうしたのよ。

美加 小見山っていう先生。雲隠れしちゃったんだって！

奈津美 へえ。

美加 警察に呼ばれて事情聞かれて、そのまま学校にも来ないで行方知れずだって…。

やっぱり黒なのよ！ きつと。噂じゃ最初から小竹ナントカとつるんで、援助

交際の手引きしたりあやしい薬売ったりしてた一味だったんじゃないかって。

奈津美 うわさでしょ。

美加 そうだけどさ。でも逮捕されるかもよ。そしたら…

奈津美 あたしに関係ないわ。

美加 だってあんた！

奈津美 あの子はあの子の人生でしょ。

美加 そういうこと言っつ？

奈津美 じゃあね。

美加 どこいくのよ！

奈津美 走りにいくの。

奈津美退場。

美加 ちよつと待ちなさいよ！ もう！

美加退場。

外。

早紀登場。

須藤登場。

早紀 お父さん…。

須藤 よう。

早紀 第三土曜日じゃないのに。

須藤 土曜日ですらない。バレたらたいへんだ。

早紀 うん。

須藤 …。

早紀 聞いたんだ、小見山先生のこと。

須藤 うん。それでこれからな、長谷川先生のところへ行ってみよつと思っんだ。

早紀 …うん。

須藤 それでその前にオマエに会っておこつと思っつな。

早紀 バレたら困るのに。

須藤 そう、バレたら困る。

早紀 …。

須藤 早紀、俺はさ、おまえの父親になりきれなかった人間だ。家庭つてもんがよくわからなかった。よくわからなままに結婚した。だからオマエに偉そうになにか言う資格なんかないんだ。

早紀 ……

須藤 おまえの親はお母さんだ。おまえのことをいちばん心配してる。だからばれたら困るようなことをしても、お母さんにだけはホントのことをいわなきゃいけない。そう思わないか？

早紀 うん。でも…

須藤 もし俺と会ってたことをしゃべって、これから俺と会えなくなっても、それはしかたないさ。

早紀 いいの？

須藤 ……俺はオマエに会うのが楽しみだったよ。こそこそ会いたくない。会うなら堂々と会いたい。だからいいさ。

早紀 ……

須藤 じゃあ…。

早紀 お父さん！ ごめんね！ ホントは…あたし…

須藤 ……(制する)謝る相手は俺じゃないだろ。

早紀 (頷く)

須藤退場

早紀退場

場転

春子の部屋

春子登場 金魚の餌やり。

小見山登場

抱擁

小見山の上着を脱がす春子。

小見山 明かりはつけないでくれ。

春子 うん。

小見山 腹が減った…。なにかないかな？

春子 (探して)リンゴ…。

小見山 うん。いいね。

春子 剥くね。

暗い中、果物ナイフで皿にリンゴを剥く春子。

小見山 金魚、どうするの。

春子 わかんない…。どうしたらいいのかな…

小見山 うちに持ってきてくれば。

春子 ……うん、そうね。

小見山 そうだよ。金魚鉢ごと持ってきてくれば。

春子 ……よく、そうしてた。

小見山 引っ越すとき？

春子 ううん。天気の良い日に、金魚鉢を持って散歩するの。日に当たてみじかと思いつて。

小見山 へえー…

春子 金魚の散歩。

小見山 うん。

春子 小さな声で話しかけながら。

小見山 うん。

春子 ずっと、話し相手だったから。厭なことがあっても、だいじょうぶ、だいじょうぶって言って…

小見山 うん。

春子 だいじょうぶ、だいじょうぶ、厭なことなんかない、悪いことなんか起こらない、もうこれ以上…(小見山の頭を撫でている)

小見山 …。

春子 飼っていてもいい？ 金魚。

小見山 もちろん。

春子 …。

ノック。

小見山 …。

春子 トイレに…。

小見山、隠れる。

春子戸口に。

奈津美登場。

奈津美 …こんばんは。

春子 …いらっしやい。

奈津美 前といっしよね。

春子 …。

奈津美 ろくでもない男にひっかかって。

春子 …。

奈津美 目え覚まさない。

春子 帰って…。

奈津美 自分でわかってるでしょう？

春子 帰ってよ！

奈津美 帰るわよ！ だけどあんたがバカなマネして振り回されるのもうゴメンなの！

春子 迷惑かけてないじゃないか！

奈津美 あんたが馬鹿なことしかすたびにあたしが尻ぬぐいしてたでしょ！

春子 だから、だからもうかまわないでよ！ あたしがどんなにバカでも姉さんに関係ないでしょ！ ほっといてよ！

奈津美 ほっとくわよ。これだけ言ったら。

春子 …。

奈津美 父さんからの伝言。…すまなかつたって。

春子 …。

奈津美 できることならやり直せばいいと思ってる。せめておまえたちは失敗しないでほしい。自分が死ぬときにおまえに子供がいてくれれば、ずっと命が続いていてくれれば…そう思いながら死ねばいい…母さんの死に顔見てそう思ったって。

春子 ……。

奈津美 あやまったのよ、あの人が。信じられる？

春子 ……。

奈津美 いまさら、よね。

春子 どうして…

奈津美 ……ん？

春子 どうしてわたしたち、こんなに、バラバラになっちゃったのかな…

奈津美 ……そうね…

春子 金魚ね…

奈津美 うん。

春子 お父さんが買ってくれたのね。

奈津美 ああ…

春子 一度だけ…たった一度だけ、お祭りに…

奈津美 ええ。

春子 あのとぎ、姉さんが、友達と会って…

奈津美 あんた、浴衣のそでで隠してあたしに見せないように持って帰ったでしょ。

春子 ……そう。姉さんにとられるって思ってた。

奈津美 バカね。(くすくす) そんなことあったわね…。

春子 (くすくす) 今、思い出した…。

奈津美 ……。

春子 結婚するの？

奈津美 うん。

春子 よかった。

奈津美 なにか？

春子 あたしが遠慮しないで済むから。

奈津美 バカ言ってるんじゃないわよ。どうぞ遠慮なく。

春子 子供できないこと知ってるの？

奈津美 ええ。

春子 もし…

奈津美 なに？

春子 お姉ちゃんが子供欲しいんなら…

奈津美 ……。

春子 あたし、産んであげてもいいよ。

奈津美 なに言ってるの？

春子 できるんだよ、そういうこと。

奈津美 そりゃ知ってるけど…

春子 須藤さんに頼めばきつとやってくれる。

奈津美 春…あんた本気なの？

春子 ……わかんない。

奈津美 ……。

春子 でもそういうことじゃないの？ ずっと命が続いてくれればって…お父さん、

そう言ってたんでしょ？

奈津美 ……。

春子 ホントはあたしたちバラバラになんかになってない。ずっとひとつなんだって、ずっといっしょにいるんだって…そんなふうに思っている？

奈津美 わからない…。

春子 …うん。

奈津美 …春？

春子 なあに。

奈津美 ありがとう。

奈津美、立ち上がって、

奈津美 もう行くわ。

春子 …。

奈津美 元気で。

春子 …(うん)

奈津美、退場。

春子、座って小見山の上着を手に取る。(客に背向け)

小見山登場。

小見山 …。

春子 ねえ。

小見山 ん？

春子 あたしたち、ずっといっしょかなあ。

小見山 ああ。

春子 あたしのこと好き？

小見山 ああ。

小見山、後から抱きすくめる。

春子 あたしのこと好き？

小見山 ああ。

春子 あたしのこと…

春子、傍らにあった果物ナイフで小見山の腹を刺す。

小見山、叫ぶ。

春子、泣きじゃくるように、小見山の手を逃れ離れる。

一方の手から小見山の上着が落ちる、その手には手帳がある。

春子、床に崩れて、引きつけを起こすように丸くなる。

小見山のうめきと春子の泣き声が低くいつまでも続く。

ノック。

須藤、登場。

小見山の様子を見る。

次に春子を見る。

須藤 先生！ 長谷川さん！

春子、泣きじゃくりながら、手帳を須藤に渡す。

暗転。

ACT.11 受精

精子くんB、D。

精子くんD それでその先生どうなったの？

精子くんB 傷は全然たいしたことなくて、腹の皮が削げた程度。

精子くんD 逮捕されたんだ？

精子くんB みたいね。

精子くんD 刺した方は？

精子くんB もちろん学校はクビ。でも罪にはなんなかったみたいね。

精子くんD どうして？

精子くんB さあ。心神喪失とかなんかそんなことじゃないかね。

精子くんD やっぱりだまされてたのがわかって錯乱しちゃったのかな。それとも…

精子くんB そんなことどうでもいいよ。そんなことよりいよいよなんだぞ。

精子くんD わかっている。

精子くんB わかっている？ いよいよ俺たちの運命が決まる時が来たんだ。大事な日だ。

その大事な日に、

精子くんD うん。

精子くんC登場。

精子くんC いやあ、待った？

精子くんD あ。

精子くんB 遅刻するとはいい度胸だ。

精子くんC なんか起きられなくて。昨日早く寝ただけで、なんかこのあたり（お腹）

がシクシク痛くてさ…。

精子くんD だいじよぶ？

精子くんB なあ、ちよつと提案があるんだが。…俺たち、今までけっこつまくやつ

てきたけど、今日は敵同士だよな。

精子くんC うん。

精子くんB だけどな、考えてみると、この中の誰が勝ってもたいした違いはない。せつ

かくここまですいしよにやってきましたんだ。せめて俺たちだけでも…協力して戦わ

ないか。

精子くんD 協力？

精子くんB 俺たち以外にも敵はざつと三億から六億はいる。そいつら全部が自分さえ

よければいいと思ってる。そこで俺たちが三人で共同して戦えば…。

精子くんD かなり有利になる？

精子くんB 俺たちのうち誰が勝っても、それは恨みっこなしだ。

精子くんC 画期的な意見だ。

精子くんBの差し出す手を握るB、D。

卵子ちゃん登場。

精子たち、争いながらゆっくり卵子に近寄る。

玉虫と奈津美登場。

奈津美ライフル銃を構えている。

*奈津美 あんたコレ火縄銃じゃないの…。

*玉虫 納屋に転がってたんですけど…。

奈津美 長いのが苦手なのよ…。

玉虫 食べられるやつ撃ってくださいよね。

奈津美 わかってるわよ…。

獲物を待つふたり。

春子、登場。金魚の餌やり。

須藤クリップボードを持って登場。

春子の様子を聞く。

春子、おなかに手を当てたりしている。

玉虫 あ。

奈津美 しッ。

奈津美、銃の狙いをつける。

奈津美、撃つ。

精子のひとりが、卵子のもとにたどりつく。

卵子は精子は手を取り、エスコート。

精子は尻尾をちぎり捨てて、卵子とともにゆっくりと退場。

幕。